飛島村史 通史編

2014 年 10 月 1 日レポートで岡邦行『伊勢湾台風 水害前線の村』を紹介した。「水害前線の村」とは愛知県飛島村。写真のように名古屋西部の臨海工業地帯に位置し、全国有数の「豊かな村」だが、海抜ゼロメートル地帯だ。その飛島村の村史通史編(2000 年 3 月)の「発刊のことば」から。

本村は、木曽川河口の葭生え地を干拓し、大宝新田は干拓以来三百余年、飛島新田は二百年を迎えます。この間、私どもの祖先は幾多の風水害、就中伊勢湾台風による長期の水没、濃尾・東南海・三河等の大震災、あるいは、第二次世界大戦中の度重なる空襲等の大災害の洗礼を受けながらもひるむこともなく、不毛の地を沃土と化し、平和で豊かな今日の飛島を築き挙げてきました。

元禄時代から始まる本村には、他町村のように、考古、古代、中世にかかわる歴史はほとんどなく、近世から始まることになりますが、私どもが何気なく踏みしめている大地にも、先祖の筆舌に尽くし得ない想像を絶する苦難の跡がしみ込んでいることがこの通史編からも読みとれます。時あたかも 2000 年、飛島村が、更に日本が次の世紀を迎えて、どのように生きていくのか、どのように発展し、そしてどのように世界に貢献していくのか、真剣に考える時でありましょう。祖先の眠るこの豊穣の地を、お年寄りには、心豊かに安心して、若者もさらに魅力ある「だれもが住みたくなる」村づくりに、本通史編がその一助となり、村民憲章の「祖先をしのび、感謝の気持ちえ働きましょう」を具現するよすがともなることをこいねがうものであります。

この「発刊のことば」は、当時の村長・佐野鳩(おさむ)による。佐野村長が名古屋市立女子短大時代の先輩だった佐野絢子さんのご主人だと、『水害最前線の村』で知った。佐野村長は 2006 年 8 月 15 日に亡くなられた。「《生まれ育ったこの飛島村は、どんなに裕福になっても、常に災害を受け入れなくてはならない環境にある。だから、村民は伊勢湾台風のときの苦労は絶対に忘れないし、黙していても抗う心は持っている。それが、私を含めた村民の強さであり、祖先から受け継いでいる死生観じゃないかな‥‥》　平和を願い、村民の健康と幸福のために死力を尽くした鳩さんらしい、村民を代表する、心に響く言葉だった。」

(2017 年 2 月 16 日)